

氏名	関 玲
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 9 3 5 6 号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	認識更新標示「へー」の使用と相互行為の進行性に関する会話分析的研究

主査	筑波大学 准教授	博士（学術）	澤田 浩子
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子
副査	筑波大学 准教授	Ph.D.（言語学）	高木 智世
副査	筑波大学 准教授	博士（日本語学）	ブッシュネル・ケード・コンラン

## 論文の要旨

本論文は、会話における認識更新標示について、会話分析(Conversation Analysis)の手法を用いて分析を行うものである。認識更新標示の中でも、特に日本語会話においてよく用いられる「へー」を対象に、連鎖上の位置に着目することによって、認識更新標示が会話の中でどのように用いられるか、認識更新標示が用いられることによってどのようなことが達成されるかを明らかにすることを目的とする。

論文は、以下の7章によって構成される。

第1章では、本研究の背景と目的が述べられている。まず、認識更新標示に関する研究史を概観した上で、同じ言語形式であっても、それが用いられる位置によって相互行為上の働きが異なることに着目した一連の研究を取り上げ、本研究がその潮流に位置づけられるものであることを示す。一方で、日本語の認識更新標示に関して連鎖上の位置に着目した研究は見られるものの、一部の位置の観察に留まることなどを指摘し、連鎖上の位置をより包括的に観察することを本研究の目的として設定している。観察対象として具体的には、(1) 話し手がターン構成単位 TCU(Turn Construction Unit)を産出している途中、(2) 基本連鎖の第二部分、(3) 質問-応答連鎖の第三の位置、(4) 一連の連鎖が収束可能な位置に至った後、の4つの位置が挙げられており、第3章から第6章にかけてこれらが順に論じられる構成となっている。

第2章では、会話分析の手法と基本概念を紹介したのち、本研究で扱う会話データの詳細と会話のトランスクリプトの記号が紹介されている。

第3章では、(1) 話し手が TCU を産出している途中に受け手によって用いられる認識更新標示「へー」が取り上げられている。まず、認識更新標示が単独で使用される場合について検討を行い、話し手の特定の情報をニュース性のあるものとして捉えたことを標示することによって、話し手に TCU の続きを産出してもらうよう機会を与えていることを主張する。次に、認識更新標示が他の言語要素と一緒に使用される場合について

検討し、受け手によってターン交替が引き起こされる場合と、ターン交替まで引き起こさない場合について論じられている。いずれの場合においても、受け手がどのように認識更新標示を産出するか、そして、話し手がどのようにその認識更新標示を理解するかによって、相互行為の連鎖の展開が異なることが示されている。

第4章では、(2) 基本連鎖の第二部分に用いられる認識更新標示「へー」が取り上げられている。ここで扱うのは「ニュースの報告－ニュースの受け取り」という基本連鎖である。第一部分で報告されたニュースを受け止める際に、「あ本当」「あそう」「ふーん」などの言語形式が用いられうるが、「へー」が特に報告者のニュース性を強調するスタンスに同調を示すために用いられることを指摘する。また、「へー」の産出によって、それまでの「ニュースの報告－ニュースの受け取り」の連鎖が収束可能な位置に至ったことが公然化され、次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出されることに着目し、例えば「へー」の母音の引き延し、音調の調整、吸気などの手続きを用いることによって受け手がターンスペースを確保し、第一部分のニュース性にかかわる質問などをすることが可能になっていることを主張する。

第5章では、(3) 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる認識更新標示「へー」が取り上げられている。特に「YES/NO 質問－応答」の連鎖と、「WH 質問－応答」の連鎖に分けて、その第三の位置に用いられる「へー」を分析し、さらに、それぞれの連鎖環境において「ふーん」との比較を行っている。分析を通して、「YES/NO 質問－応答」連鎖の第三の位置において、「へー」は「想定外」の応答への反応として用いられるが、「ふーん」は「想定通り」の応答への反応として用いられることを明らかにしている。また、「WH 質問－応答」連鎖の第三の位置においては、第4章で分析した基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」と同様に、ニュース性を強調するスタンスに同調を示すために用いられるが、「ふーん」は単に応答の部分を受け止めたことを示すために用いられることを明らかにしている。

第6章では、(4) 一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる認識更新標示「へー」が取り上げられている。本章では、一連の連鎖を「連鎖組織上関連付けられているひと連りの連鎖」と定義し、以下に示す2つの環境で用いられる「へー」を分析する。①会話参加者の間に認識の相違が生じた場合、一連の「質問－応答」連鎖を通してその相違を解消したのちに、受け手は「へー」を用いて異なる認識を受け入れるスタンスを示すことで、一連の連鎖を明示的に収束させる。②報告されたニュースを契機に、関連する一連の連鎖が展開されるが、会話で起きている問題がそれ以上解決できないと認識された場合、受け手は「へー」を用いて、一度提示された報告を再びニュースとして受け止め直すことで一連の連鎖を明示的に収束させる。上記の2つの連鎖環境は異なるものの、いずれの環境においても、「へー」が、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させ、会話を前進させるための会話資源として用いられていることを指摘している。さらに、本章で論じている「一連の連鎖」の収束が、単に形式上連なっている「発話の連鎖」の収束を意味するだけでなく、会話参加者が複数の連鎖を通してそれぞれ行っている「活動の連鎖」の収束を意味することも論じられている。

第7章では、各章で論じてきたことをまとめたうえで、本研究の成果及び今後の課題について述べられている。本研究の成果として、第一に、実際の会話データを用いて観察することによって、具体的な相互行為環境において認識更新標示がどのように用いられ、理解されるかを明らかにした点、また第二に、認識更新標示に後続する行為連鎖がどのように導かれていくかを明らかにした点が挙げられている。そして第三に、人々の相互行為の組織の仕方を詳細に記述したことで、認識更新標示が、どのような情報をどのように受け止めたかという点の標示に関わる言語資源であると同時に、会話参加者間の社会的関係の構築にも大きく関わる言語資源であることを指摘できている点がある。さらに第四に、認識更新標示が用いられる連鎖上の位置について体系的に観察したことで、今後の認識更新標示研究の一つのモデルを示すことができている点が挙げられている。以上の成果を踏まえ、最後に今後の認識更新標示の体系的な解明に向けた展望が述べられている。

## 審査の要旨

### 1 批評

認識更新標示とは、会話のなかで、参加者の認識状態（例えば、知識、情報、志向、意識など）に何らかの変化が起きたことを示す標示とされ、各言語とも多くの研究者によって扱われてきたテーマである。その中でも、英語の認識更新標示“oh”について、それが用いられる会話内の位置によって相互行為上の働きが異なることが Heritag (1984)によって指摘されて以降、「連鎖上の位置」に着目した研究に関心が集まってきた。そのような流れの中で本論文は、日本語の認識更新標示の一つである「へー」を扱った Mori (2006), Tanaka (2013)の記述を出発点としつつ、より多くのデータを包括的に扱おうとした点で意欲的な論文であり、連鎖上の位置についての多様性を提示できている点で高く評価することができる。

さらに、本論文の意義は単に、認識更新標示が生じうる位置の観察を積み上げた点のみにあるわけではない。本論文が提示した4つの連鎖上の位置は、会話を構成する分析単位の観点から見て、ある一定の体系性と網羅性を備えることができている。それは、丹念に多くの会話データにあたり、データに忠実に分析を重ねた結果であり、その帰結として論理的に理に適った体系性を提示できている点で、本論文の洞察性に秀逸さが認められる。これまで看過されてきた認識更新標示の位置と用法が丹念に掬い取られ、どの章においても事例観察の緻密さを保ちながら、論文全体を通して見た時に、一つの研究モデルを提示することにまで到達している点で、十分に高い評価の得られる研究となっている。

以上のような点で、本論文は、言語学における記述的研究としても、会話分析の手法を用いた経験的研究としても、認識更新標示研究における重要な成果を含んでいる。さらに、認識更新標示を、認識の更新に関する相互行為の観点のみから分析するのではなく、認識更新標示に後続する行為連鎖にも目を向け分析したことで、ターンの取得や一連の連鎖の収束、また参加者間の社会的関係の構築など、会話行動全体に関わる相互行為の言語資源としても利用されている点に言及できていることも評価に値する。

ただし、第6章で提示された「一連の連鎖」という分析単位が、本論文で扱った範囲を上回るような多くの多様な事例を分析する際にどの程度有効なのか、また、第7章で言及されている、「認識更新標示の使用が会話参加者間の社会的関係に及ぼす影響」とはいかなるものなのか、などの重要な課題が残されている。しかし、この点はむしろ本論文の持つ将来的発展性を示すもので、本論文の価値を何ら貶めるものではない。

### 2 最終試験

令和2年1月27日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。